
葵の空

厄夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葵の空

【Nコード】

N2912F

【作者名】

厄夜

【あらすじ】

葵は無気力女子高生。3年前、変わってしまった幼馴染に失恋して・・・で、現在出会ったのは腹立つ俺様S男？ホモ男に、美人な・・・百合女?!出るわ出るわの濃い人間ばかりのバンドに引き込まれ・・・。鬼畜に虐げられながらも下克上目指して頑張ります。

一話：最悪の日（前書き）

作者は音楽関係をまったく知りません。

おかしい部分は多々あると思います、それを不愉快に感じる人も居るかもしれませんが

どうか大目に見てやってください

一話：最悪の日

今日ほど最悪な日はそうない。

葵は本日5度目の溜め息を深く、深くついた。

朝は寝坊し、急いで学校へと向かえば車に泥を跳ねられ、学校に着いたら着いたで生徒指導に捕まり（しかも運の悪いことに学校でも1、2を争う厳しい学年主任）

やっと授業が終わったと思ったら放課後呼び出され反省文を書かされた（しかも20枚・まあ普段から遅刻が多いし仕方ないかもしれないが）

心の中で半べそかきながら帰宅すれば、弟と母はそれはそれは楽しそうにバラエティ番組を見ていた

憎たらしいとリビングの音が響く廊下から睨んでも意味はなく足音を立てないように二階へと向かった

ふじわらあおい
藤原葵は一言で言い表すならば『暗い』だ

長い髪はぼさぼさ、前髪で顔は目元は見えず、その上眼鏡をかけている。

学校ではまったく目立たず、がり勉タイプかと言えば違う
体育は常に休み。屋上でストライキなんて日常茶飯事。

それでも先生方から文句を言われたいのは、成績は良いから。

葵は無気力すぎる自分に自嘲する

趣味はあると言えはあるし、恋だっでする
だけど友達は要らない、一人の方が好き。
クラスで女子達が恋の話に騒いでいても会話に加わろうとは思わな
かった

（ああ、でも恋は終わってたか）

葵はベッドの上に寝そべり、殺風景な自身の部屋を虚ろに一瞥する。

あれは確か、中学一年の頃

葵には好きな人が居た

幼馴染の修也^{しゅうや}。

小さな・・・生まれた時からと言っても過言ではないほど小さい頃から一緒だった

仲は非常に良く、近所でも引っ付きぶりは有名だった

「修也！」

「なんだよ葵ー、あ、アイス食いたいから金貸して」

「嫌ですー、自分で買え」

葵は常に修也に引っ付いていて、修也は笑いながらそれを受け入れていた

毎日が楽しくて、これからも続くんだと思っていた

一学期がやっと終わって、夏休み

何をして遊ぼう

初めてのバイトに挑戦してみようか
海にも行こう

その前に宿題をしなきゃ

笑いながら家に帰った

家に帰れば、珍しく父が帰っていた
父は外国各地を回るほどの有名演奏家

楽器とあらば何でも弾きこなして家族を楽しませてくれる良いお父さん。

私はなかでも、エレキギターが格好良くて好きだった・

よく子供の様な目をする父は、その日も目を輝かせて家族の前で宣言した

「一ヶ月、旅行に行こう！」

旅行、それを聞いて家族で大はしゃぎ

「何処に行こう、イタリア？パリ？」

「葵はギターが好きだからな、ウィーンだ！」

「え、関係ないじゃん！」

「ちなみに反論は聞きません」
「何それ！」

オーストリアの首都、ウィーン

芸術の都と名高いこの地で色んなことを体験した

市内を西に行けば森林があり、都会育ちの私には新鮮だった

演奏家である父の友人達と演奏会もした

有名な演奏家もいたので吃驚どころか心臓が出そうだった

「お父さん・・・友達居たんだねえ・・・」
「あはは、失礼だなー・・・葵ちゃんは」

思わず可愛くない言葉が口から零れ落ちて、父に拳骨をくらった

一ヶ月という期間はあっという間で・・・

・・・ウィーンは、私の何処かを変えたような気がした。

心の弾みが消えないまま、帰国した

修也にお土産話を沢山聞かせよう

そう、意気込んで

家に帰ると、すぐに隣の修也の家へ向かった
修也の家は無用心で鍵はいつも開けっ放し
インターホンを押さずに葵が遊びに来るのはいつものことで・・・

修也の部屋の前まで来た時、中から声がした

知らない、女の声。

「ねえ、修也君。今度はいつ会える？」

「ん？、当然無理かもなあ」

「えー・・・何で？もしかして例の幼馴染の女の子？」

「そう、今日辺り帰って来るんだよ」

「付き合ってるの？」

「違う違う、妹みたいなもんだよ」

「へえ、お守りかー。大変だね」

「本当にな、あいつ煩いんだよな・・・」

凍りついた。

妹だと思われてるのは・・・分かっていた

けれど、

お守り？

大変？

煩い？

訳がわからず、・・・もしかしたら認めたくなかったのかもしれない

その日から、修也から離れた

もしかしたら・・・なにか理由があつたのかもしれない
自分にそう言い聞かせて・・・話しかけてくることを期待した

でも

結局は、駄目だった

連絡のないまま夏休みは過ぎて、

二学期が始まって・・・男のグループに交じって楽しげに会話して、

まるで、無視されているよう。

悲しかった

悔しかった

修也は自分の物ではない

わかって・・・いるのに。

決定打は、中学二年の終り

私の・・・誕生日。

無視されても、修也が好きだった

だから追いかけた
ばれないようにこっそりと

修也は男女の交じった集団の中で、
飴を舐めていた

甘党なのは、変わらないんだ

そう思った時、

集団の中の化粧を塗りたくった女の子が修也に抱きついた

思わず近づこうとして・・・修也の言葉に凍りついた

「シューヤ君！部活終わったならさ、遊びに行こうよ！」

「いいよ」

「やったー！」

「あれ？お前さー今日、葵ちゃん誕生日じゃなかったっけ？」

「げっ、なんでお前そんなこと知ってんだよ」

「いーじゃん、いーじゃん。で、どーすんの」

「部活あるし、パス」

笑いながら言い切る修也の声

えーひつでえの！

遊びに行くつつつたのどの口だよ！

ぎやははと笑う声は、何処か遠くで

フィルターがかかったようにくぐもって聴こえた

誰か、嘘って言って

瞼を下ろして

耳を塞いで

私の心は凍りついたまま、
溶けない。

二話…出会い？

5月14日、今日は忌々しいほどの雨日和。

家から出れば、外は重たげな灰色の空

憂鬱に拍車をかける天候

傘を差すのが面倒……

だけど差さなければ濡れねずみ
ジャージに着替えるのはもっと面倒。

仕方なしに傘を差せば、隣の家が開くのが見えた

(…雨だからって早く出ようと思うんじゃないかなかった…)

案の定、出てきたのは修也

（まあ、どうせ無視され・・・）

「なあ」

「え」

何、何で

「傘差してくれんだったら、後ろ乗ってもいいぜ」

「・・・いい」

少し考えた自分が憎い

終わったのだと、言い聞かせる

「ふーん」

修也はちらとこちらを見て、玄関脇の傘を手にとった

「じゃあ、俺も歩くか」

（何でだよ）

口には出さずに突っ込む、じゃあって何だよ、繋がってないだろ

勝手にしろと言わんばかりに葵はさっさと歩くことにした

ザーザーと降る雨音意外、無音の世界

心地は・・・良くない

学校に着くと、ざわざわと教室内がざわめく

修也はモテる、何せさわやかスポーツマンと名高いサッカー部の主将殿。

そりゃ、クラス・・・いや学校一暗い女と一緒に登校したら信じられないのは無理もない

教室に着けば興味はないと葵は席に着くことにした

教室の端、目立たぬ窓側の席。

雨は変わらず降り続けている

少し、軽率すぎた

嫉妬に狂った女子達から呼び出しでもあるだろう
実際に既に痛いほどの敵意の視線がちくちく刺さっている

・・・面倒だ

保健室にでも、逃げようか。

昼の休み時間に、保健室へと向かう

気分が悪くなってきたのだ

を、理由に早退したい

保健室にいるのは格好いい若い先生・・・・・・・・ではなく
よぼよぼのお爺ちゃん先生。

でも割と話を通じるから好き

ちやっかり早退の紙を貰い、担任に渡し（疑わしそうに見ていた）
手早く荷物を詰め込んで学校を出る。

出たのは良いけど、家・・・入れない。

いつもなら学校終了時刻は弟が葵より先に帰宅していて鍵いらず

さて困った。

あまりうろつろしすぎるのは見回りに捕まるだろうし・・・

と思いつつも脚は勝手に動き、
気づけば

「どい、此处」

何処かの、裏通り。

狭い路地は昼間なのに、薄暗く寒い

・・・此処で良いか

少し自棄になってしゃがみこむ。

すると背後から声がした

「おい、そのブス」

(・・・初対面に言う言葉じゃないな)
でも否定はしない、何せいつも言われてるから。

黙っていると、イライラし始めたのか真後ろに来る気配

「何か・・・用でも」

仕方なしに答える
・・・仕方なしに。

「邪魔だ、どけ」

そう言えば、此処狭いんだっけ

重い腰を上げ、後ろを振り返ることなくすたすたと歩く

足音は着いてくる

路地を抜けても。（何故さ）

仕方なしに（二度目）振り向く

「何で、着いてくんの？」

着いてきた男は、黒髪にピアス、煙草を吸って立っていた
嫌なことに何処か・・・修也に似ている気がした

「喋れたのか、新種の珍獣かと思った」

形の良い唇から出た言葉に、張り倒そうかと考える

「・・・・・・・・」

思うだけでしないけど。(チキン)

「……………」

反応・・・待ちか？

「一度喋ったじゃん」

「そうだったか？」

銜えていた煙草をふーと吐き出す

煙い

・・・男はどうでもいい、
それより目に留まったのは、男の背中のギターケース

「・・・それ、ベース？」

気がついたら呟いていた

「なんだ、解るのか」

意外そうに男が返す

まともな反応できたのか

「・・・やってるし・・・」

何言ってるんだろう、いつもなら決して言ったりしないのに

「へえ」

さっきより意外そうに言っていると、視線がかち合った

どんよりした、空のような・・・死んだ漆黒。

いつも鏡で見る自分と、同じ瞳。

と、ぽつりと雨が頬に当たった

空を見上げれば、また振り出してきたのか
大粒の雨が落ちてくる

うち、と舌打ちする声が聞こえて（目の前の男しかないけど）
男は煙草を踏み消すと

葵の腕を掴んで走り出した

「えっ・・・ちょ・・・」

いきなりのことに着いていけず、混乱する

男は構わずに走り（速過ぎる）、あるマンションの前で急停止した
葵は久しぶりの全力疾走に息がついていけず、咳き込んだ
そんな葵を尻目に男はマンションの中へと入って行く

葵の手首を掴んだまま。

「ちょっと待って」

やっと息を整え、男に話しかける

「何だ」

「何で私まで着いてくる必要があるの」

「俺が暇だから」

（本気でこの男を張り飛ばしていいかな）

美形が何でも許されるとは思うな。

「拭け」

タオルを投げられ、受け取る

・・・優しい？

「俺のベース」

「・・・」

期待するのは無駄か、そうか。

三話：変な男

（変な人）

葵は男を一瞥した。

男は視線に気づいているだろうに気にせず髪を拭っている。

私にもタオルをよこせよと思いつつ、男のベースを拭いてやる
湿気で少し湿っていた

楽器に罪はない

無音の世界が続く

「お前、飯作れ」

葵は固まった

は？

確かにお昼ではあるけども

何言ってんだこの男は
ポカンとする葵に

「飯作れって言うてんだ、耳悪いのか」

どうやら空耳ではないようだ

「なんで作らないといけないの」

「俺が腹減った」

「………（勝手に餓死しろ）」

「てめえ今何考えた」

「何も」

睨まれ、キッチンへと逃げ込む

冷蔵庫を覗くと、野菜しかなかった

あの男、菜食主義か

適当に詰め込まれた野菜を出すと、何故かパンまで突っ込まれていた

（サンドウィッチ・・・かな、スープは面倒だし・・・）

パンを切って挟んでいると、いつの間にか男が後ろに居た

お前は幽霊か

男は葵の手元を見て眉を顰めた

「・・・しょぼいな」

「じゃあ自分で作れ」

野菜とパンだけで何作れってんだ

「食ってやる、有り難く思え」

「あーそー」

葵は目で座れと言っている男の前の席に座った

どうやら自分も食べて良いらしい

もそもそと食べる

葵は食が細く、一つ半ほど食べて終わった

「ごちそ」待て」

「・・・何」

「中途半端だろうが、全部食べ。見ていて気持ち悪い」

「無理」

「食べ」

「無理」

「・・・食べ」

「吐いてもいいなら」

「あっち行って食べ」

指の先は、トイレ。

「余計食えるか！」

本当に何なんだこの男は

雨は未だ止まず、

葵はいつまでここにいればいいのか分からず

窓際で座り込む

男は気にする様子もなくぼんやりと煙草を吸っている

（なんで私は着いて来たんだろう）

名前も知らない、この男に。

（いやいや、この男が引つ張ったせいであって自分からでは・・・）

「ベース」

またか、今度は何だ

「ベース、できるって言ったな」

（言っただけ）

・・・言っただけがしないでもない。

「弾いてみる」

「断る」

「弾かないならこれがどうなってもいいんだな」

男が取り出したのは淡いブルーの携帯

「は・・・え、なんで私の携帯持つてんの?！」

慌てて取り返そうとするが、身長が足りない！

「弾け」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

間はほんの少しの抵抗である

四話：蹴り（返し）たい背中

「下手だな」

ずばっと切捨て

「あくまで趣味だし・・・」

言い訳にしか聴こえない。

実際、結構プライド傷つけられるんですが

「まあ、俺の知り合いの中ではマシな方だがな」

口端をにやりと上げて笑う男に、不覚にも照れた顔、絶対赤くありませんように。

「周りがレベル低いだけだとも言っが」

照れを返せ、この野郎。

「じゃあ、あんたはどうなの」

ベース、と押し付ける

男の目を細めて笑みが深くなる（嫌な予感）

「有り難く思えよ、俺はライブ以外で人前ではめったに弾かん」

（ライブって・・・バンドしてるのか？）

意外と言えば、意外

でも一番似合うような気がする。

+++

啞然とした

力強い音、それに高度なテクニック

脳まで揺さぶられるような感覚になる

悔しいが・・・魅せられた

「当たり前だ」

まるで心を読んだかのように男が答える

「・・・」

「悔しそうな顔をするな、ブスの度合いが増す。」

「忠告どうも」

睨みつけてやれば、男はクックと楽しげに銜えた煙草を吸う

（ニコチン中毒め・・・）

ちらと外を見れば、雨は止んでいた

「止んだか・・・よし、出てけ。」

しっしと犬のよう（いやこの男の場合虫けら以下に違いない）に玄関に追いやられる

ちよつと待て、

「私、まだあんたの名前聞いてない」

ぼそりと抗議すれば、どうしても良さそうに男は受け流した

「知りたかったら先に名前を言えるくらいに足りない脳みそ増やして来い」

どんつと突き飛ばされ、振り返る間もなく扉の閉める音がした

意味がないのは分かっているが、思わず扉ごしに睨みつける

（普通・・・女の扱いはどんっじゃなくてとんっじゃないの）

色々つつこむところが多すぎて変なところをつつこんでしまった

（しかし・・・あの男、雨宿りの恩があるとはいえ・・・パシリに使いすぎだろ）

最後の言葉が「脳みそ増やして来い。」
どれだけ俺様なんだ・・・

(・・・ん？・・・増やして来い？・・・またあいつと会うのは絶対に嫌)

よし、この辺りの道は絶対に歩かないようにしようと決心し
我が家へと帰宅した

決心はすぐ崩されることに気づかずに。

帰宅すると、弟が丁度帰宅したところで玄関で鉢合わせた

「あれ、姉ちゃん早いじゃん」

「夏は、．．いつもより遅い」

「まあねー、隣の組の真紀ちゃんと一緒に．．」

聞いてねえ、誰だよ真紀ちゃんて。

私が俺様男にパシられてた間、貴様はその真紀ちゃんとかやうと仲良しこよししてたわけか

姉 が奴隷のように扱われてる間に、いちゃいちゃしてた？

「．．．．．姉ちゃん、口からだだ漏れ。」

「．．．．．」

思わず口を塞ぐ

「とりあえず聞かないでおくよ・・・」

ありがとうマイブラザー

でも、姉ちゃんを哀れむように見るな。

鞆を部屋のベッドに放り投げ、
下の階へ下りて、冷蔵庫に向かう

喉が渴いた

そういえば、今日は一度も水分を補給していない。

冷蔵庫を開けると、牛乳がなかった

いつもは脱、155cmのために牛乳を飲んでいる

最も、もう成長期は過ぎて

飲んでも骨が太くなるくらいだとは分かっているのだけれども・・・

どちらかと言えば習慣になったと言ったほうが正しいかもしれない

お茶を取り出し、一気に飲み干す

(母さんに牛乳ないから帰りがけに買い足してって伝えよ)

制服のポケットに手を突っ込む

が

ない。

「・・・あれ」

何度触っても、何もない

まさか

「・・・あんの野郎!!」

携帯はあの男（魔王）の手元に。

脳裏ににやにやする男の顔が浮かんで・・・

・
・
・
持っていた空のペットボトルが悲鳴を上げた

五話：鷲と鼠

葵は恨めしげに、部屋の中に入る陽光を睨んだ

恐らく母が開けたであろうカーテンから、起きろと言わんばかりに葵の顔に当たっている

葵は太陽の光が苦手だ

弟に吸血鬼と称されるほど、陽光嫌い

カーテンは黒い遮光カーテン。

低血圧な葵は朝に弱い、よって効果的な起こし方が今まさにされているこれだ。

「・・・」

時計を見れば・・・9時。

完全に遅刻だ

起きたくない、しかし学校がある。

葵の中で天秤が揺れる

・・・ふと幼馴染の顔が浮かんで、

実際にあればがっしょんと音を立てるであろう葵の天秤はあっさり
休む方へと傾いた
単位は・・・なんとかなるだろう。

母は朝早くから仕事があるので、起きた頃には既にいない

小学生の弟は母と同じ頃に学校へと出る

よって今、葵を学校へと追い立てるモノは何もなかった

とにかく起きようと緩慢なしぐさで起き上がる

クローゼットの鏡には幽鬼の・・・いや葵の姿が映る

寝癖を直すことなく下の階へと下りる

冷蔵庫に手をかけて、

そつえば結局母に牛乳のことを頼むのを忘れていたと思い出す

それと同時に浮かんだ男の顔は即消滅させる。

（昨日の晩御飯のカレーが余ってたはず）

昨晩は疲れ果てて（気疲れ）何も食べる気になれなかった
いくら食が細いからといって何も食べてないと空腹になる。

鍋を覗けば、少しだけ残っていた

恐らくここまでは少なくともなかっただろう

葵と正反対に良く食べる夏十（弟）^{なつと}が朝に食べて行ったに違いない

ちなみに、弟の名前の由来は書いた通りで

夏の8月10日生まれだから。

冷凍御飯をレンジにかけて、

拳大の御飯にカレーをかける。

行儀悪くスプーンを口に銜えながらカレーを机まで運ぶ

電話に伝言が残っていたので、ついでにボタンを押す

電子音の後、母の声が響く
どうやら遅くなるらしい。

机に座り、銜えたスプーンを手に持ち替える

「頂きま」昨日どこぞの溝鼠のごとく座り込んでいたブスへ」

がしゃん

何故、ヤツの声が・・・？！

ぱつと電話の方へと思わず振り向く

『この伝言から一時間内に来い、来なきゃ携帯はトイレに流すぞ』

すばやく電話に駆け寄り、時間を確かめる

どうやら１５分ほど前のものらしく、安堵の溜め息をつく。

きつとあの男はやると言ったら迷うことなく実行に移すタイプだ

安堵の溜め息はついたものの、ヤツの家までは３０分ほど時間がかかるはず

「・・・食える・・・わけないか」

抗議する腹を無視して、カレーにラップをしておく

・・・帰って来たら夏十に食われていそいだ。

葵は髪の整えや化粧をまったくしない
眼鏡をかけてしまえば、普段と同じだ。

私服を出すのも面倒だったので、畳んであった制服を着る

後は時間短縮のための自転車。

普段めつたに乘らない自転車に乗り、男の家へと目指す
(携帯救出のために)

+
+
+

マンションの前に自転車を止めて、部屋まで急ぐと
男が扉の前で立っていた

手には・・・ストップウォッチ

（ヤツめ！数秒単位で実行に移す気満々だ！！）

慌てて走りこめば、男は組んでいた腕を下ろしストップウォッチを
見・・・

「ッチ」

おい、舌打ちしたぞこの男。

そこまで私の携帯を破壊したいかこの野郎

「むしろお前が嘆き悶える姿が見たかった」

ハアハアと荒い息を深呼吸で整える

「・・・心読むな」

「口に出てんだよ馬鹿が」

「・・・」

あれ、デジャヴ

+
+
+

携帯をもつ盗られないようにしっかりと握り締める

「で、呼んだ理由は？」

男は煙草をふー、と吐く

「暇」

(こいつ本気で殺そうか)

「というのは冗談だ」

「・・・・・・・・・・本当は？」

「炒飯食いたい」

「自分で作れ！！！！」

今まさにちゃぶ台があったらひっくり返していた。

「面倒」

男は飄々と煙草をふかす

「まあ、炒飯を食べたいというのも理由のひとつだが」

もう驚かんとぞ、何言われても。

葵は男を冷たく見る

「ベース、教えてやろうか」

「・・・へ？」

思わず口を開けて男を見上げる

「アホ面見せるな、目が腐る」

（ああ空耳だな、この男が教えるなんてははは）

「教えて欲しいのかどうのかさっさと答えろ、その口に空き缶突っ込むぞ」

「教えてください」

（空き缶を突っ込もうとするな、手に持ってスタンバイするな！）

男は残念そうに空き缶を見つめてぽいっとゴミ箱を投げた

「一週間で使い物になるようにしてやる」

（教えてくれるのは有り難いし、嬉しい・・・嬉しいが・・・）

「使い物って・・・」

「交換条件だ、俺がベースを教える。

その代わり

バンドに入れ」

葵はまさに、鷲の前の鼠の気分というものを生まれて初めて味わった

・・・何この悪徳商法まがいの勧誘。

六話：Sと奴隸と犬

「バンドに入れ」

この男に出会ってから調子を崩されっぱなしだ

「・・・・・・・・」

「返事しろボケカス」

ここでなんで私なの、とか少女漫画みたく言っても
この男から期待する言葉は得られないだろう

ぼんやりとする葵に男は何か感じたのか黙って観察している

「・・・つまんなかったら」

ぼそ、と小さく葵が呟く

「あ？」

濁点のついてそうな「あ」だ

「つまんなかったら、すぐ止めるから」

自分でも可愛くない返事だ、と葵は思う

男は見間違いかと思うほどほんの少し、目を見開いてから
不敵な笑みを見せてにやと笑う

「それは絶対でない」

今度は葵が吃驚する番だ

まさかここまできつぱりと言われるとは思わなかったのだ

「飽きねえよ、うちのバンドは」

クツクと笑いながら男は煙草を吸う

ぷか、と吐き出された煙はさほど大きくない部屋の中で霧散した

+
+
+

葵は男の前で承諾したが……早々に後悔し始めた

この男、葵をまるで我が奴隷と言わんばかりにこき使う

まさに パシリ＞練習 のような割合。

（なんで、こんな事を私はしているのか）

葵は今、台所に立っていた

溜まりに溜まった皿達を洗うために。

（どう考えてもおかしいよこれ。私何しにここに来てるんだっけ、練習、そう練習でしたね。はは……あれ何だろっ目から……いや汗だなこれは。）

遠い目をしながらも手は黙々と動く。

この汚れた皿を溜めた張本人は後ろでベースの手入れをしている

（この皿全部割ったるか畜生）

第一どうやったらこんなに皿溜めれるんだよ

生活能力ないのか？！

山のような皿をさつきよりも力（と書いて怨みと読む）を込めて洗う

でも割りません、何されるか分かったもんじゃない

この間は誤って奴のお気に入りしかったコップを落として割ったら
無言のアイアンクローをかけられた

握力半端ないことは分かりました、知りたくもなかったけど。

ピンポーン。

葵の現実逃避が境地に達しかけた頃、玄関からチャイムが鳴った

ちらと男を見るが、変わらずにベースの手入れをしている

ピンポーン

また鳴った、聞き間違いではない

が、男は動かない

葵は次にくるだろう事を予想して、濡れた手をタオルで拭き耳を塞ぐ

ピンポーン………ピンポンピンポンピンポンピンポン！！

やはりきた、連続インターホン。

非難するように葵は男を見ると、男は既に玄関へと向かっていた

心なしか青筋がたっている気がする。

ガ・・・・・・・・・・チャ

開けたくないんだな、音だけですごく分かる

と、思った瞬間

扉は勢い良く開き外から大型犬・・・じゃなくて人が突進した

「じーん！！！！酷いだろお前、居るのは分かってんだから早く出るよ！！！！」

ゴンッ

（あ、頭ぶつけた）

すかさず何処の誰だか知らないが合掌しておく。

「貴様……いつもいつも普通に入ることができないのか
！」

死んで出直せ！

男が突進した男に技をかける……苦しそうだ、すごく。
顔が真っ赤を通り越して真っ青だ

（……てか、男男ってややこしいな……）

そういえば、名前未だに教えてもらっていない。

出会って数日過ぎたのに・・・

「じつ・・・ん・・・死ぬ・・・死にます。冗談抜・・・きで・・・離してください・・・」

ああ、死にそう

「ッフ・・・言葉で教えても理解できない犬には躑が必要だろうが」

ああ、楽しそう

青筋たってるけど。

「・・・躑って・・・俺、どっちかって言うと攻めの方が・・・
「聞いてねえ」

ガスッ

良い音がして、犬男が崩れ落ちる

（・・・今、聞いてはいけない言葉を聞いたような気がする）

清々したとやり切った顔で立ち上がるS男

一瞬目が合ったが、慌てて蛇口を捻り皿洗いを再開する

すると水音に気付いたのか崩れ落ちた犬男がこちら見た

「え？」

ありえないモノを見たという表情だ、かなり失礼・・・

「女・・・の子？・・・え、じんの家に女の子・・・女の子がいる？！」

ぎゃあああと慄く犬男

（珍獣か私は）

「分かった！幽霊！！幽霊だろ！髪の毛ボサボサだし顔色悪いし！
じんに捨てられて怨んで自縛霊になった幽霊とかでしょ！！」

悪かったな、幽霊のような女で。

「（怨みは持つてるけども）違います。」

「え・・違うの？じゃあ・・・この部屋の前の住人の幽「幽霊か
ら離れる」

どれだけ信じたくないんだよ

ふう、とS男が溜め息をつく

「いい加減にしろ、こいつは唯の奴隷だ」

「それも違うわ！」

誰かこいつらを生まれ直させる！

七話：あちら側の人

葵は目の前の男二人を見ていた

いや、正しくは睨んでいた

「じんー、聞いてくれよー」

犬はさめざめと泣いてSに抱きつこうとし、

「どうせ振られたんだろ」

Sは犬を心底うざそうに押しのけながら話す

葵は思う、

何が悲しくてこの酒臭い空間に居なければならないのか・

「ぐず・・・葵ちゃんも聞いてよー、俺の可哀想な話を」

「（自分で可愛そうとか言うな）・・・名前、何で知ってんですか」
教えた覚えはまったくない。

「え、ああ・・・ほらこれ」

ぱつと取り出したのは私の生徒手帳・・・って何で持ってる？！

そろいもそろって手癖悪いな！！

「返してください」

「じゃあ話聞いて」

「・・・分かりました」

うう・・・胃痛がしてきた・・・

+
+
+

開始から30分、話は終わっていない

ついでにこの男の名前は『アキラ』らしい。

「でね、セナのやつ・・・俺と絶交するとか言うんだぜ?! そりゃちよつと余所見してた俺も悪いけどさ・・・」

(てか、さっきから気になって仕方なかったんだけども)

「あの・・・セナって人、女の人・・・ですよネ?」

表現の中に、やたらとそちら系の言葉がちらほら・・・

「え?、いや男だけど?」

「・・・」

「・・・・・・・・」

「冗談じゃ・・・ないよ」

て、ことは・・・

「俺、男としか付き合えないんだ」

だから葵ちゃん襲ったりしないから安心してね

（て、にこやかに笑われても・・・）

S男にヘルプ視線を送ってみるが、
俺に迷惑かからなければ良いという感じで煙草を吸っている

「あー……えっと……あ！さっきから『じん』って一体……」

話題逸らしのために思っていた疑問を投げかけてみる

「へ？……あれ、もしかして……いやそうか、うん」

「（一人で納得されても……）あの？」

「あ、ごめんごめん。『じん』ね、ほら、こいつの事」

うんうんと頷きながらアキラは親指でS男の方を指す
S男は変わらず明後日を向いたままだ

「こいつさ、何故か人に名前を教えないんだよ」

眉を顰めた葵にアキラは苦笑しながら言う

「俺、こいつと出会って5年・・くらいかな・・になるんだけど、未だに名前教えてもらってなくてさ」

葵はさらに眉をしかめた

「じゃあ『じん』は・・？」

アキラは茶髪の頭をぽりぽりかく

「苗字だよ。」

「苗字？」

「そう、苗字。神野^{じんの}っていうけどな・・・名前は教えてくれない」

肩をすくめるアキラから葵は神野と呼ばれたS男へと視線を移す

以前名前を聞いた時と同じようにどうしても良いと言つ風に目を瞑っていた

「神野、じゃ味気ないから『じん』って勝手に呼んでんの」

アキラは机の上に肘をついてニツと笑う

（変だ変だとは思ってたけど・・・かなり変な人間っぽい？）

今まで黙っていた神野は小さく舌打ちした

「余計な事をペラペラと」

効果音がつくなら、まさに「ギロツ」という視線をアキラへと送る

アキラは慣れているのか・・・いや少し顔が青いが、笑ったまま

「えー、だって俺が教えでもしないと最悪一生話さないだろお前」

そんなアキラに神野は眉間に皺を寄せている

「・・・・・・・・」

アキラはその様子を見ると驚いたように目を開く

「・・・・・・・・え、じん・・・もしかし」

ジリリリリリ！！！

突然の機械音

「うわっ、何？！このひと昔前の電話音！」

耳を塞ぐアキラ。

葵はサツとポケットから携帯を取り出す

「すみません、私です」

「ええっ！・・・もうちよつと今時の子みたいに着メロとかにし
ようよ・・・」

着信音を選ぶのが面倒で適当に、とは言えない

「少し、失礼します」

葵は携帯に出る

発信者は弟からで、母の変わりに晩御飯を作るよつにと言つ伝言だ
った

葵は携帯を閉じると神野の方へと向いた

「晩御飯作れって言われたから、もう帰る」

「そうか」

「それだけ?!・・・もつと会話ないの?!」

アキラが突っ込むと葵は首を傾げた

「これ以上何を話せと・・・」

「君たち恋人とかじゃ「違います」

それは嫌だ

考えただけでも寒い。

「じゃあ何の関係？」

「・・・えっと、ベースを習いに来てるんで・・・先生と弟子？」

アキラは「そうなんだーつまんないなあ」と笑い（つまんなくて良い）
「引き止めてごめんね」と手を振った

葵は自分のベースをケースに仕舞い、軽く会釈すると出て行った。

アキラは葵を見送り、神野の方を振り返る

「珍しいね、じんが自分からそういうのするなんて」

にやにやと笑うアキラに神野は鼻で笑う

「気紛れだ、ただのな。・使えないと判断したら切り捨てる」

アキラはふーんと言うと窓を見るふりをして神野を顔を一瞥した

（その割には、楽しそうな顔してるな）

もしかしたら・・・

アキラはそう考えたところで打ち切った

期待するだけなら何度もしてきたかと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2912f/>

葵の空

2010年11月16日03時41分発行